

## 地域生活学研究 3 号の刊行に寄せて

宮口侗迪

早稲田大学

富山大学で研究に従事しておられる先生方を中心に本誌「地域生活学研究」が創刊されて2年が経過し、ここに3号が刊行されたことに、まず心からの敬意を表したい。ますます複雑化し、ヴァーチャルな事象が絡み合う現代社会そのものを研究することは、従来からの縦割りの社会科学にはとても無理な相談になってきている。このような流れを正面から見据えて、富山大学で、学際的共同研究の場としての「地域生活学」の創出をめざされていることはすばらしい。

地方都市にある大学は、地域と極めて近い存在であり、地域生活の内実にリアルに接近することが可能である。しかし数十年前は、その利を活かして地域の実態から新しい学問領域を切り開く作業には、必ずしも力が注がれなかったのではなかろうか。そのように感じていたのは筆者のみではあるまい。しかし今多くの地方都市にある大学で、地域連携推進のための組織やプロジェクトがつくられ、教員と学生が地域から学び、そして地域に何らかの貢献をすることが普通になってきた。このことは長く地域とリアルに付き合ってきた筆者にとって、極めて嬉しい傾向である。

筆者は岐阜県境の村に育ち、東京の大学に行ってから地域の違いに目覚め、地理学教室に進んだ。卒論を書くころに過疎問題が注目されるようになって、日本の農山村の行く末が気になり、それ以来ずっと地方の農山村や小都市を歩いている。近年では国の過疎問題懇談会の座長として、過疎地域のための法整備にもかかわらせていただいた。東京に身を置いて地方を考えることに次第に疑問を持つようになり、家族ともども富山市に移って

26年になる。この間週1往復のペースで富山と東京を行き来し、合間にいろんな地域を訪ねる生活を続けており、自分としては出稼ぎ人のつもりである。

40年以上前の卒論調査の頃は、農家を訪ねて話を聞かせてもらうこと自体がひと苦勞であった。

「お隣で聞いたら」とか「お前の相手なんかしている暇はない」という言葉を何度耳にしたことか。しかし集落を単位にした生活を考えるには一人一人の取材が不可欠であり、お酒が多少強かったこともあって、村を訪ねる呼吸というものが次第に身について行ったように思う。

しかし今は、地域調査というものが情報として相当行きわたってきたためか、学生の状況を見ても、地域を訪ねて冷たくされることはあまりなくなったように思う。とくに高齢化が進行しているような集落では、話し相手として喜んで迎えてもらえたりする。地域の行政も、大学との縁を濃くすることが、地域にとってプラスになると考えるようになった。その点からも、大学が多様な専門分野の研究者を結集して地域の暮らしを総合的にとらえ、それを「学」に高めていこうとする作業は、極めて大きな意義を持つといえる。

筆者が地理学教室に進んだ頃、富山県では、小中高の地理の先生方が「扇状地同人会」というグループを結成し、県内のリアルな地域調査の成果を次々と刊行しておられた。その中心に、筆者の高校の恩師でもあり、後に富山大学に移られた故北林吉弘先生がおられたが、当時としては全国に誇るべき活動であったと思う。ぜひ紹介しておきたい。

富山に住むようになってからは富山市の都市計画審議会長を務めるようになり、地方都市の価値とそのあり方にも関心が育った。そのようなことから研究会の代表である竹内潔先生に声をかけていただき、2年前のフォーラムにも参加させていただいた。いささか縁のある人間として、「地域生活学研究」の持続とますますの発展を心から期待するものである。